

井上靖の中央アジアへの旅（1965）と ソ連のインバウンド観光

日本人知識人の“西域”への憧憬と社会主義プロパガンダとの間で

みやざき ちほ
宮崎 千穂 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

On May 5, 1965, Yasushi Inoue (1907-1991), one of Japan's most well-known post-World War II novelists, departed on the ferry "Baikal" from the port of Yokohama to Nakhotka. Thus began his travels around the Soviet Union. The purpose of his journey was to enter the "Sai-iki" (the "Western Region") of Central Asia. Inoue had dreamed of visiting these lands since his student days thirty years earlier.

This paper describes Inoue's travel around "Sai-iki" by analyzing his unpublished notes, photographs, and literary works, along with that of other Japanese travelers. Inoue's travel contributed to the strategy for developing the Soviet Union's tourism industry in the 1960s. The Inbound Tourism policy of the Soviet Union during this period appealed to Japanese intellectuals who dreamed of visiting "Sai-iki" and seeing its ancient ruins. But in another way, Inoue's travel was incorporated into the inbound tourism system as propaganda, a way to advertise the achievements of socialism.

キーワード：井上靖、“西域”、中央アジア、ソ連のインバウンド観光、社会主義プロパガンダ

Keywords : Yasushi Inoue, "Sai-iki" ("the Western Region"), Central Asia, Inbound Tourism in the Soviet Union, Socialist Propaganda

1. はじめに

シルクロード・ブームの立役者である戦後日本の国民的作家井上靖(1907-1991)が学生時代からの長年の夢を叶えて〈西域〉に足を踏み入れたのは、1965(昭和40)年のことであった。井上靖の〈西域〉といえば、日本では一般的に敦煌をはじめ甘粛州や新疆ウイグル自治区を中心とした中国領が想起される。〈西域〉という言葉自体が古代中国による西方についての呼称であるが、井上が旅した最初の〈西域〉はより西方のソ連領中央アジアであった¹。

この旅の背景には、井上靖ら日本の知識人らの〈西域〉への憧れとともに、同時期に整備されつつあったソ連のインバウンド観光策がみえる。本稿では、こうした観点に留意し、「西トルキスタン」(旧ソ連中央アジア諸国)の旅について記録した井上靖の未刊行の創作ノート「第一回西トルキスタン西域の旅」(一)～(三)(以下、「西域ノート」と略記)、公刊の紀

行文、また、井上の旅の同行者の著述を分析して1965年の井上靖一行の中央アジアを中心としたソ連観光の実態と特徴を明らかにする。その際、その他の日本人知識人が記した同時期のソ連旅行をめぐる著述や新聞記事なども参考にする。ソ連観光に関する研究には、社会主義体制に必要とされた国内休暇旅行に焦点を当てたケンカーの研究(Koenker D.P. 2013)、国際観光の全般的な研究(Орлов И.Б., Попов А.Д. 2018など)のほか、宗教、史跡・文化財保護の観点から高橋(2018)の研究が際立つが、日本人のソ連旅行に関する研究はほぼ未着手である。しかし、本稿で指摘するように、井上一行のソ連旅行は招待旅行と一般観光との組み合わせという特徴を有し、その実態解明は外国人観光客誘致政策と社会主義プロパガンダが一行の旅にいかにかつ働いたのかという点からソ連観光を考える際に有意義である。また、井上の初めての〈西域〉への旅を扱う本研究は、1970・80年

代を最盛期とする日本のシルクロード・ブームの歴史的意味の解明にも繋がるであろう。

2. 1950・60年代におけるソ連の外国人観光客誘致政策と日本におけるソ連観光への関心

井上靖のソ連旅行の背景として、同時代のソ連の外国人観光客誘致政策と日本におけるソ連観光への関心の高まりについてみておこう。

ソ連の外国人向け観光の出発点は、1929年の国営会社インツォーリストの創設であり、1930年代には「See USSR！」という宣伝ポスター²などで積極的に外国人観光客誘致が行われていた。第二次世界大戦後、1955年にソ連と外国との間で観光客の往来が復活すると、それ以降、1960年代にかけて外国人観光客誘致政策が展開された。1958年の『読売新聞』は、ロンドンでのマリク・ソ連大使の観光旅行と平和攻勢の関連についての表明や、

インツーリストの宣伝など、ソ連がかつてない大がかりな「カム・イースト（東へいらっしやい）」運動を開始したことを伝えている³。ソ連政府は、1964年から1965年にかけて各国のソ連訪問客数が伸びたことに対し（図1参照）、翌年の数値目標を示して外国人観光客誘致を鼓舞した。日本人観光客の場合、1783名（1964年）から4359名（1965年）の増加に対し、1966年の目標数値として5800名が挙げられている⁴。フルシチョフ時代以後、外国の一般市民がソ連を観光できる可能性が格段に高まり、史跡・文化財もまた「ソ連民族の文化について敵が広めた情報の虚飾を粉碎する」ための観光資源として認識されるようになっていた⁵。井上靖一行の史跡巡りを目的とした旅は、1950・1960年代の社会主義的プロパガンダの一環として史跡・文化財が外国人に公開されていたことによって可能となったことに留意すべきである（5.、6.参照）。

一方、1960年代は、一般の日本人にとって海外旅行へのハードルが下がった時期であり、そうした時期に井上靖一行がソ連へ渡航したことにも注目できる。1960年代の世界的な観光ブームの中で、日本では1964年に海外渡航が自由化し、マスツーリズムの時代が幕を開けていた。

日本における相次ぐソ連観光の宣伝やソ連旅行記の出版は、かように日本・ソ連両国で国際観光が興隆していたことを背景とする。日本交通公社海外宣伝部は、

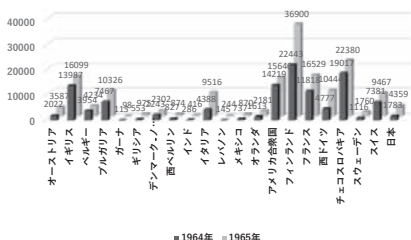


図1 1964年と比較した1965年の各国観光客数の増加

（出所）И.Б. Орлов, А.Д. Попов Сквозь «железный занавес» SEE USSR! Иностранные туристы и призраки потемкинских деревень. М., 2018. С.170を基に筆者がグラフ化

1955年以降、『国際観光情報』にニューヨーク・タイムズの在モスクワ通信員であったアメリカ人記者H・ソールズベリーの「ソヴェト観光事情」⁶をはじめとしてソ連観光情報を掲載している。この時期には大学教授や作家などの知識人にもソ連旅行に関連する著述がみられる。特に、ソ連経済研究者野々村一雄（1913-1998）が、1960年にモスクワで開催された第25回国際東洋学会議に参加するためにソ連・ヨーロッパへ出張した際の『ソヴェト旅行記』（1961年）のほか、1966年3月より5月にかけてのソ連旅行を基にインツーリストの協力を得て日本初の日本語による「日本人の一般旅行者のために書かれたソヴェト旅行案内」⁷と自負する『ソヴェト旅行案内』（1966年）を出版したことに注目できる。この旅行案内は、ソ連研究者がソ連の経済対策および社会主義宣伝のための観光戦略と日本人によるソ連旅行の需要（の期待）とを結び付けて生まれたものといえよう。

旅行業界も、ソ連の観光情報の収集、商品の開発に取り組み始めた。新聞各紙にはソ連各地の観光地に関する記事が特集され、旅行社によるソ連旅行ツアーの宣伝が掲載されている。例えば、1967年5月の『読売新聞』の連載「シルクロードのソ連」第1回には、ウズベク共和国のタシケント、サマルカンド、ブハラ、カザフ共和国のアルマトイがインツーリストからソ連の新観光ルートとして「ただ今売り出し中」とある⁸。ソ連極東船舶公団により日本・ナホトカ航路⁹が開設されると、この航路とシベリア鉄道を利用したソ連経由のヨーロッパへ旅行が10万円前後で可能となり、空路より安価で多くの利用客があったことから、1967年には日本交通公社がソ連経由のヨーロッパ旅行「ソ連セット」を発売して若年層に人気を博した¹⁰。このソ連セットには「ソ連経由、ヨーロッパセット旅行」と「ソ連・シルクロードの旅」の「ソ連へ気軽に旅ができる」二つの新企画があった。同社はインツーリストと契約し、渡航

手続きの短縮（一か月以内）、モスクワでの公社駐在員の派遣、日本語ガイド付き市内観光バス「かもめ号」を用意し、日本人のソ連旅行に便宜を図っていた¹¹。

3. 創作ノート「第一回西トルキスタン西域の旅」— 紀行文執筆へ —

井上靖は、1965年と1968年の2度、ソ連に旅行している。最初の旅は1965年5月5日より6月上旬にかけての約1か月間であった。本章では、1965年のソ連旅行の内実を明らかにする記録として、「第一回西トルキスタン西域の旅」と表に記されたノートの性格について考える。

「西域ノート」の史料的位置づけについて考えよう。ノートの分量は罫線のある綴りのノート3冊分であり（通常、見開きの右頁のみ使用）、日付のある日記風にペンで記され、スケッチも含む。「西域ノート」の現所蔵先である神奈川近代文学館は、同ノートを「創作ノート」として分類している。井上の西域旅行を題材にした紀行文は雑誌『太陽』に「西域の旅」として1966年1月号より11月号まで連載されており、その紀行文の創作ノートという位置づけである。井上靖が紀行文執筆のために「西域ノート」を作成したことは、間違いのないであろう。「西域ノート」中には日記を記すという記述があることから、このノートは日記の後に作成された可能性がある。旅中の“メモ”と“ノート”に関しては、井上が訪問現場でメモを取り、ホテルでノートを整理していた姿が同行者に捉えられている。井上の旅行に3度同行した加藤九祚（1922-2016）は、「六五年、六八年はシルクロードが開放される前で、先生もお若く思い出はつきません。先生はシルクロードに本当に情熱を打ち込んでおられ夜中までノートを整理されていた姿が忘れられません」¹²、「いつも、現地では取材用の手帳にメモされ、ホテルに帰ってそれをノートに整理される。このときほとんど完成した状態に仕上げられることもある」¹³と回顧している。井上が訪問現場で熱心にメモをとる姿は、同じく同行

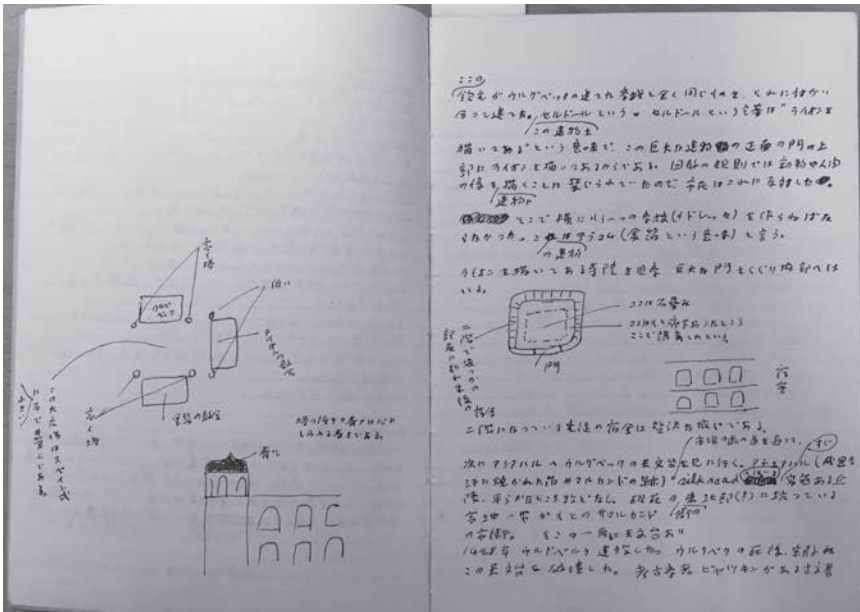


図2 レギスタン広場（サマルカンド）についての記録とスケッチ
 (出所) 井上靖「第一回西トルキスタン西域の旅」(二) (神奈川近代文学館所蔵)



図3 井上靖撮影によるレギスタン広場のティラコリ・メドレセの塔
 (出所) 井上修一氏所蔵

の永田一修 (1903-1988) 撮影と思われる写真「古代ビャンジケントの岡に立ちメモをとる井上靖氏」(『西域の旅／2』『太陽』)¹⁴からもうかがえる。加藤のいう“ノート”が何を指すのか不明であるが、旅の記録は、現場でのメモ、ホテル等で作った日記、ノートの順で整理され、紀行文の執筆の準備がなされたと考えられる。

創作ノートとしての「西域ノート」の存在は、井上靖の旅が文学作品の創作のための取材旅行の性格を帯びていたことを示している。「西域ノート」に訪問先に関する情報が非常に詳しく丁寧に記されていることから、それが知られよう。訪問先に関する情報源のひとつは、同行の加藤九祚であった。出発前、井上は加藤より、加藤自身が翻訳したソ連の考古学者A・Y・ヤクボフスキー (1886-1953) の著作(『古代ビャンジケント』)を見せてもらい繰り返し読み¹⁵、中央アジアに関する知識を増やし、古代遺跡ペンジケントへの思いを膨らませていた(5-1参照)。さらに、旅中でも井上は情報収集に努めており、訪問先の研究所や遺跡、街で出会った人々、ガイド通訳などを通して得たとみられる諸情報も「西域ノート」に記されている。

表1 井上靖「西域の旅」の各号のタイトルと各章の見出し

1月号 西域の旅1 大バミール高原の入口に立つ陽光を浴びた1200年前の都市、灰色のザラフシャン川を渡る、木々の葉の揺らぐ博物館、古代ビャンジケントの丘に登る、解説：ソグド人	7月号 西域の旅7 地下に眠る古きサマルカンド 道路工事中の大発見、7世紀を発掘する、消滅した第二の首都、チムール王家の廟を見る、ふたたびタジク共和国へ、新幹線道路に行く
2月号 西域の旅2 古代ビャンジケントの没落 花咲くソグドの地、アラブに追われた悲劇の運命、ムグ山に埋もれた文化、夏の日ビャンジケント遺跡	8月号 西域の旅8 緑の近代都市タシケント 街を埋める樹々の緑、すさまじい破壊と建設、集産地タシケント、ヴェルニ東方研究所の業績、美しいナボイの詩集、雑多な人種で賑う市場
3月号 西域の旅3 中世の生きる街ブハラ 2000年の年齢を持つ城邑、ジンギスカンの大劫掠、白い土屋の街に住む人々、魂の吸い込まれるような「青」	9月号 西域の旅9 砂漠の街アシユハバード 新工業都市チル・チック、砂嵐におどろく、西トルキスタン最後の旅程、震災の地アシユハバード、絨毯工場と運河、アナウの遺跡、忘れ得ぬ人
4月号 西域の旅4 幻の隊商とブハラの宝石市場	10月号 西域の旅 補編その1 モスクワ レニングラード 戦後最高に明るいモスクワ、レーニン廟、そして教会、古いもの新しいもの、英雄都市レニングラード、エルミタージュ博物館、美しいレニングラード
5月号 西域の旅5 花と森の都サマルカンド 中世と近代の混合した街、繰り返された興廢の歴史、満地これ花園、果樹、美草、英雄チムールの生涯	11月号 西域の旅 補編その2 シベリヤの風物 イルクーツクへ飛ぶ、19世紀の流刑地、春近いバイカル湖、世界で唯一つ淡水アザラシ、ハバロフスク、日本人墓地、極東鉄道の沿線風景、延々たる湿地帯、巨大なるロシア
6月号 西域の旅6 チムール朝栄華の古都 “生きている王”の廟群、サマルカンドの象徴、ハヌィムにまつわる物語、眼にかぶる往時の授業、刺客によるウルグベクの最後	

(出所) 井上靖「西域の旅」『太陽』平凡社、1966年より筆者作成

「西域ノート」には井上の眼に映った地形や建造物なども繊細なタッチでスケッチされており、井上の美的な視点が織り込まれていることも紀行文にはみられない特徴である。(図2)はその一例であるが、サマルカンドのレギスタン広場(今日までウズベキスタンの観光の目玉である)の建造物が配置や様式、用途や素材

などの説明を交えて丁寧にスケッチされている。塔のスケッチには「塔の頂きの青さは心にしみ入る青さである」との添え書きがあるが、これは井上が作品中に中央アジアの印象として繰り返し用いた表現である(例えば、表1の下線)。(図3)の写真の裏面には、「サマルカンド、レギスタン広場にあるティラ・コリのメドレ

セ]、「靖さつえい」、「1965（昭和40年）第1回ソ連旅行」との鉛筆書きがある。この写真に写っている塔は（図2）の「西域ノート」に井上がスケッチした塔と同一の形であり、井上が頂の青さに心を奪われた塔がティラコリ・メドレセの塔であることがわかる。ソ連では写真撮影を嫌う人も多かったが、井上一行が旅先で目にした風景や人物を写真形態でも記録していたことにも注目される¹⁶。

「西域ノート」は、井上靖のソ連旅行の実態を示す貴重な史料である。その点で、文学作品として推敲が重ねられた紀行文「西域の旅」、および、第2回目のソ連旅行の後に2度の旅行を題材とした『朝日新聞』の連載小説「西域物語」¹⁷とは異なる。これらの文学作品から井上一行の旅程を知ることはパズルのようで容易でない。例えば、『太陽』連載の紀行文「西域の旅」の構成や各回内容（表1）にみる都市の記載順序（タジク共和国のパミール高原、ペンジケント遺跡、ウズベク共和国のブハラ、サマルカンド、タシケント、トルクメン共和国のアシハバード）は、井上の都市への関心に応じた順であり、実際の旅程とは異なる。一方、「西域ノート」からは、井上一行の実際の順序に沿った旅の足取りや細かい行動、加えて旅中の素朴な感想をうかがい知りうる（4-2、5.参照）。

4. 1965年のソ連旅行の同行者と旅のルート

4-1 ソ連旅行実現の背景と同行者たち

井上靖のソ連旅行が実現した背景には井上がソ連、中央アジアに精通した人物と知己の間柄であったことが挙げられ、また、旅が取材旅行としてサポートされていたことも推測される。

1865年の旅は井上がいう「親しい友人」¹⁸とのグループ旅行であったが、同行者各人の個性がソ連旅行実現に貢献したと考えられる。その同行者とは前掲の平凡社編集部勤務の加藤九祚、洋画家・写真家の永田一脩のほか、『サンデー毎日』編集部員で小説家の野村尚吾（1912-1975）、

永田の弟子の写真家の常盤茂雄、ドイツ文学者の福田宏年（1927-1997）、大学生で井上の長男の井上修一（ドイツ文学者）であった。野村尚吾によると、一昨年に魚釣りの一行とソ連に出かけた永田が、中央アジア旅行が可能であることを確かめて帰り、早速、長年西域を夢見てきた井上に相談をもちかけて実現の運びとなった。同じく一昨年この地方を旅行し、ロシア語が得意でシベリアや中央アジアに関する著書や翻訳のある加藤久祚の同行で旅は心強いものとなったという¹⁹。

永田は戦前、前衛芸術家連盟、全日本無産者芸術連盟に参加するなど社会主義思想に親和的な団体で活動しており、ソ連旅行の経験があったとしても不思議ではない。加藤にはシベリア抑留経験があり、ロシア語が堪能でソ連の文化に精通していた。平凡社の加藤は、かつて同社の辞典を背負って営業しており、原稿の受け取りに井上のところへ出入りした際、井上に非常な勉強家と認められ大変気に入られたのだという²⁰。ドイツ文学者で井上の姻戚にあたる福田宏年は、ドイツの地理学者F・フォン・リヒトホーフ（1833-1905）が名付けた「ザイデンシュトラセン（絹の道）」という中央アジアを中心にユーラシアを交易路で表す地理的概念を世界に知らしめたスウェーデンの探検家S・ヘディン（1865-1952）の名著『シルクロード』（岩波文庫、1984年）、『さまよえる湖』（同、1990年）を翻訳し、高度成長期の日本においてヘディンのシルクロードに関する業績を一般に広めた人物であった²¹。

井上一行は各人が各界の専門家であり、ソ連旅行は、井上は無論のこと、各人の仕事のための、もしくはそれに役立つ旅行であった。この点で、まずは、この旅行と毎日新聞社との関わりを指摘できる。井上自身も毎日新聞の元学芸記者であるが、その後輩にあたる野村は帰国後まもなく編集部員をしていた『サンデー毎日』（1965年）に特派員レポート「秘境西域に行く」²²を連載しており、野村にとって旅は取材旅行であったと考え

られる。また、野村のレポートおよび井上の紀行文「西域の旅」の写真は永田が担当していた。写真家の永田と常盤にとっても、旅は取材旅行の意味合いを持っていたとみられる。次節（4-2）で触れるように、同紙の編集長はじめ、講談社、東京新聞、文春などの出版社やメディアが井上一行の出発の見送りをしている。この見送りには、交友関係による意味もあるだろうが、一行の旅と仕事との繋がりもうかがわせる。

4-2 「西域ノート」から明らかになる旅のルート

「西域ノート」からは、東京の自宅を出発するところから帰路のハバロフスクまで、ソ連領内の訪問都市、訪問先のみならず、訪問の順序、移動手段、宿泊場所、行動を含めて井上靖一行の旅の全貌を知りうる。（図4）は旅のルートを地図上に示したものであり、具体的な旅程は（表3）に整理した。井上靖は、車2台（1台は講談社）で東京の自宅を出て横浜へ行き、『サンデー毎日』編集長や東京新聞、文春などのメディア・出版関係者や親族らに見送られ横浜をバイカル号（図5）で出港し、津軽海峡を通過して海路ナホトカへ向かった。ナホトカからはシベリア鉄道（極東列車、図6）でハバロフスクへ移動している。「ナホトカ航路」と「極東列車」の組み合わせは、東京—モスクワ間の空路直行便がなかった当時、日本からソ連（ヨーロッパ）への一般的なルートであり、日本人乗客を想定したサービスが用意されていた。野村尚吾は、井上一行が乗ったソ連のバイカル号の車内放送は露語、日本語、英語の「たどたどしいおあいきょうぶり」であったが、極東列車では日本人の電気主任が「きれいな標準語で気持ちがいい」車内放送を担当し、日本の流行歌や民謡を適当にはさみ「故国を離れた気持ちが薄い」と移動時の好印象を記している²³。

その後、井上一行は、空路でモスクワへ飛び、レニングラードを訪問した後、モスクワに戻り、そこから空路ウズベク



図4 井上靖一行のソ連旅行(1965年)のルート

(出所) 井上靖「第一回西トルキスタン西域の旅」(一)～(三)(神奈川近代文学館所蔵)を基に筆者作成



上: 図5 「バイカル号」

下: 図6 「極東列車」

(出所) 井上修一氏所蔵

共和国の首都タシケントへ向かっている。ウズベク領内においては、タシケントから空路でブハラへ飛び、その後、同じく空路でサマルカンドを訪問、その後、自動車でタジク共和国のペンジケントを日帰りして訪れて再びサマルカンドへ戻った後、今度は空路タジク共和国の首都ド

ウシヤンベへ飛び、そこからトルクメン共和国の首都アシハバードへ飛行機で移動し、モスクワへ戻った。日本への帰路は、モスクワから空路でイルクーツクへ飛び(オムスク経由)、イルクーツクから飛行機でハバロフスクへ戻っている。「西域ノート」の記録はここまでで終わるが、ハバロフスクからは往路同様に列車でナホトカへ戻ったことが推測され、『毎日新聞』によると、6月8日午後4時にバイカル号で横浜に帰港している²⁴。自宅を出発した5月5日から数えて都合34日間の長旅であった。

5. 井上靖一行のソ連旅行の実態

5-1 招待旅行と一般観光との組み合わせ

ソ連の観光政策下における井上靖一行の旅の性格を「西域ノート」から案ずるに、それは井上靖のソ連作家連盟²⁵による招待旅行と一般の外国人向け観光との組み合わせであったと考えられる。また、この旅は、著名な作家井上の旅らしく、交友ある現地の日本人にサポートされていた。

井上一行の旅が日本からの〈デレガーツィヤ(代表团)〉の招待旅行であり、一般のソ連観光とは異なる特別な旅行であったことは、(表3)のように、モスクワでのソ連作家連盟関係者による空港出迎えに始まり、5月9日の大祖国戦争(第二次世界大戦中の独ソ戦)戦勝記念日における軍事パレードの招待席での見学(井上のみ。図7はその時の特別な観覧券である)、サマルカンドでの作家ボロジン、イルクーツクでの作家連盟支部の訪問といった行事にみえる²⁶。また、モスクワ滞在中は産経新聞モスクワ支局長の大谷慧が送迎、観劇や郊外へのピクニック、日本大使館、外務省関係者との面会(会食か)のほか、数次の自宅への招待など、何かと世話をしていることも注目される。

一方で、井上一行の旅には、1960年代にソ連が外国人に提供していた観光ルートをなぞるマスツーリズムの側面もみられた。(表2)は、1966年当時に外国人に開放されていた観光都市一覧である。当時、ロシア、ウクライナの二大共和国を中心にソ連の全14共和国の指定都市が外



図7 1965年5月9日の大祖国戦争戦勝20周年記念日の観覧券。

「Иноуэ Ясуси (いのう えやすし)」と記入されている。

(出所) 井上靖「第一回西トルキスタン西域の旅」(一) (神奈川近代文学館所蔵)

表2 ソ連の各共和国における外国人観光都市 (1966年)

共和国名	都市名
ロシア	モスクワ、イルクーツク、ヴォルゴグラード、ヴラジミール、ウリヤノフスク、オリョール、オルジョニキーゼ、カザン、カリーニン、クールスク、クラスノダール、スズダリ、スタヴロポリ、スモレンスク、ソチ、トリヤッティ、ノヴゴロド、ハバロフスク、ピャティゴルスク、プラーツク、ポリソグレブスク、ベトロザヴォツク、ムルマンスク、レニングラード(※)、ロストフ・ナ・ドヌー、ヤロスラヴリ
ウクライナ	キエフ、ヴィンニツァ、ウーゾゴロド、オデッサ、カネフ、クレメンチューク、ザポロジエ、シンフェローポリ、リゾフ、チェルカッサイ、ドネツク、チェルノフツィ、ハリコフ、ヘルソン、ポルタヴァ、ヤルタ
白ロシア	ミンスク、プレスト
ウズベク	タシケント、サマルカンド、ブハラ
カザフ	アルマ・アタ、チムケント
グルジア	トビリシ、クターイシ、ゴリ、スフミ、ツハルトゥボ、バクリアニ、バトゥミ、ボルジョミ
アゼルバイジャン	バクー、クバー、スムガイト、フダート
アルメニア	エレヴァン
タジク	ドゥシャンベ
トゥルクメン	アシハバード
モルダヴィア	キシニョフ、ベルイツイ
ラトヴィア	リガ
リトワニア	ヴィリニユス
エストニア	タリン

(出所) 野々村一雄『ソヴィエト旅行案内』を基に筆者作成。同書にはレニングラード(※印)が欠落しているため追記した。地名は原文のまま。下線は井上靖一行の訪問地。

国人観光客に開かれていた。野村尚吾が、当初、ソ連の「辺境地区」まで行けるのは「ソ連の特別なはからい」ゆえだと考えていたが、それが認識不足で「こんどわれわれ七人の旅行も、ソ連のインツウリストの観光コースによって、まわったにすぎない」²⁷と述べているのも、井上一行の旅程にソ連提供のお決まりルートという一面があったためである。ソ連の「辺境地区」、すなわち、カフカース、中央アジアも外国人観光客を受け入れていた。ただし、井上一行の訪問地のうちタジク共和国のベンジケントは例外で、外国人に開かれていなかった。井上一行が訪問できたのは、彼らが予め訪問を切望し、インツウリストを通して交渉した結果であった。加藤九祚の回想によると、通常は誘いを断らない井上が通訳の友人であるサマルカンド大学の教授の招きを「今日は少し疲れたし、明日は大事なベンジケント旅行もあることだから」と断るほど、ベンジケントは井上の「待望」の訪問先であり、「たしかその年から外国人旅行者に『解禁』されたばかりで、私も日本を出発するときから楽しみにしていた場所」であったという²⁸。ベンジケントが外国人旅行者に「解禁」されていたというのは加藤の誤解であろうが、井上一行がベンジケント訪問をソ連旅行の最大の楽しみとしていた様子が知られよう。

5-2 管理と“自由”の間

外国人観光客のソ連内での行動はインツウリストに管理されていたが、井上靖一行の旅は、「西域ノート」によれば、かなり自由であった印象を受ける。

通常、外国人観光客には、予め決められた旅程を逸脱することは難しかった。それは、インツウリストの業務が外国人のみを扱う包括サービスの特徴としており、外国人観光客は空港・鉄道駅の送迎、手荷物運搬、ホテル（インツウリスト指定）での食事を含む一定の規格ツアー料金を先払いし、その払込証明書（バウチャー）を持ってソ連旅行に出かけるためである²⁹。現地では、ホテルが観光客を管

理していた。ホテルは旅券を一時預かり滞在登録をして客を把握し、ホテル内のサービス・ビューローが客の一切の必要に応じた。各階の昇降口には「デジュルーナヤ」（当直女性）が昼夜通して座っており、各階を管理していた一 部屋の鍵の管理（部屋の出入り時に鍵を預ける。宿泊者の顔は覚えられており、黙っていても鍵を出されることが多い）、盗難防止、宿泊者の注文（お茶や靴磨きなど）対応³⁰。外国人観光客の個別対応を担ったのは、インツウリストから派遣されるガイド通訳である。ガイド通訳は、案内・通訳のみならず、外国人旅行者が快適に旅を過ごせるよう便宜を図り、諸サービスの提供のほか、外国人観光客の旅程を管理し行動を把握する役割も担っていた。大都市レニングラードの例では、ガイド通訳には外国人観光客の反ソ思想を念頭に彼らのスパイ的な「誘発的」質問に対して「熟練した、熱心な党の回答」をすることが求められていた³¹。

これに対して、井上靖の「西域ノート」や紀行文、野村尚吾や加藤九祚の著述からは、井上一行が旅に不自由を感じていた様子は見受けられない。井上一行には、公認の観光コースにはないベンジケント訪問という旅の主目的も叶えられていた。一般の観光客も旅行中の希望をインツウリストに相談することができたが、インツウリストによる井上一行への対応の柔軟さには招待旅行として訪ソした井上への特別な配慮が働いていた可能性も否定できない³²。

「西域ノート」（表3）が示すように、井上靖一行は一般の観光地訪問のほかは比較的自由に過ごしている。モスクワでは特に産経新聞の大谷支局長に夜の行事として市内見学（5月9日）、日本大使館訪問（5月10日）、大谷宅訪問（5月29日は午前2時迄、30日は午前0時迄）を世話されており、また、5月29日にはモスクワ郊外へ自動車でピクニックにも連れて行ってもらっている。モスクワの他、レニングラード、タシケント、イルクーツクでも夕方から夜にかけて、たびたび

表3 井上靖一行のソ連旅行時の訪問先と出来事 (1965年)

日にち	滞在都市	訪問先・出来事	宿泊施設	日にち	滞在都市	訪問先・出来事	宿泊施設
5月5日	東京⇒移動	8時30分: 自宅発 (車2台、1台は講談社)、横浜へ、12時: バイカル号出帆	船中泊	5月21日	プハラ	9時30分: ホテル発(インツウリストガイド兼運転手ゴルプノフと)、ボロ・ハウス教会、要塞(アルク)、師範大学、キエフ公園、イスマイル・サマニ廟、チャシュマ・アユブ教会、カリヤン塔・カリヤン教会、午後: 半月と星の離宮、宝石市場、隊商集会所(キャラバン・サライ跡)、クウケルダツシマ・モデルセ、チャル・ミナレ	プハラの宿
5月6日	移動	船中(9時: 仙台沖、16時: 津軽海峡入、21時: 津軽海峡出)	船中泊	5月22日	プハラ ⇒サマルカンド	9時: ホテル発、沙漠見物へ(ホテルの女性事務員も同行、小型バス)、帰途に要塞(イブシイナの記念碑建設予定地前)、15時20分: ホテル発、16時20分: プハラ空港離陸、サマルカンド着、ホテル、市場見物(加藤案内)、夕食後ホテル傍らの公園散歩	サマルカンドの近代的ホテル
5月7日	移動	15時: 陸地見える、ナホトカ着、18時: 汽車発車	車中泊	5月23日	サマルカンド	シャヒ・ジンダ・アンサンブル、ビビ・ハニム教会、レギスタン広場、ウルグベク天文台、アフラシア遺跡、ホテル、葡萄酒、夕食、日記整理(ウシャコフ、加藤はウシャコフ友人宅へ)	サマルカンドの近代的ホテル
5月8日	移動	車中(7時30分: ルジノ、8時30分: イマン、11時40分: ビギン、15時10分: ハバロフスク着、バスで空港へ、17時20分: ハバロフスク空港離陸、2時20分(21時20分): モスクワ着、インツウリストの待合室へ、空港出迎え(ソ連作家連盟のムスレボフ、アルプゾフ、ステルマフ、ピヌス女史、産経の大谷慧)、バスでホテルへ(大谷も)	メトロポール・ホテル	5月24日	サマルカンド ⇒ベンジケント ⇒サマルカンド	9時50分: ホテル発、ベンジケントへ、ルダキ地誌博物館、ベンジケント遺跡、18時: (ホテルへ?) 帰る	サマルカンドの近代的ホテル
5月9日	モスクワ	9時~: 赤の広場(戦勝記念日観兵式見学)、12時: ホテル、13時まで: 日記、15時~: インツウリストの大型バスで市内見物(福田、修一、野村と。インツウリストの説明あり。モスクワ大学、20時~: 産経の大谷慧の案内で夜の市内見物(モスクワ大学すすめが丘)、22時頃: ホテル	メトロポール・ホテル	5月25日	サマルカンド ⇒ドシャンベ	10時: ホテル発、郊外のホジア・アフロテ教会、チムール廟、博物館(1930年時はユダヤ教会、革命後は政府外人接待所)、17時: サマルカンド空港発、ドシャンベ着、	ドシャンベ・ホテル(マイニ広場前)
5月10日	モスクワ	5時: 日記、9時: 食事、10時: ホテル発、歴史博物館(考古学関係見学)、百貨店、15時: ホテル出、ドル・コーナーで買い物、19時: 大使館(大谷、下田の招き。大使館、外務省関係者と。館前)、22時半: ホテル(1時半まで大谷、福田と福田の部屋で飲む)	メトロポール・ホテル	5月26日	ドシャンベ	チャイハナ「ラハ」、建設中の公園、コムソモール公園、博物館、ドシャンベ川沿いをドライブ、夜: タジク映画鑑賞(撮影所試写室)	ドシャンベ・ホテル
5月11日	モスクワ	直食後: ホテル近く散歩(福田、修一、加藤と。ジェルズキンスキー広場まで)、10時45分: ホテル発、レーニン廟、クレムリン、15時: 作家同盟の招き(修一、福田、加藤、永田、アルプゾフ、女詩人、評論家、美術家など)、16時: ホテル、19時: チャイコフスキー記念コンサートホール、ホテルの食堂でビール	メトロポール・ホテル	5月27日	ドシャンベ ⇒アシハバード	6時30分: ホテル発、7時40分: ドシャンベ空港離陸、9時30分: アシハバード着、ホテル、朝食、11時: 国立地誌博物館、夜: 日本人2世の須藤みよの夫婦の訪問受ける(福田、加藤、修一と。23時まで部屋で飲む)	トルクメニスタン・ホテル
5月12日	モスクワ	9時20分: ホテル発、ザゴルスクへ(車かバス)、11時半: ザゴルスク着、トロイツェ・セルギエフ・ラウラ教会、ウスベシキ教会、トロイク教会、ザゴルスク国立歴史博物館、17時: ホテル(大谷に会い、バレエチケットを貰う)、劇場でバレエ鑑賞「白鳥の湖」(ホテルより徒歩10分)、10時: ホテルで食事 ※「インツウリストのウンヤコフ」のメモあり	メトロポール・ホテル	5月28日	アシハバード	9時: 食事、絨毯工場、運河、クリトリススキー湖(人造湖)、午後: アナウ遺跡、夜: 食事後、須藤宅へ招待(加藤、福田、修一、野村と。ブランデーとコーヒー御馳走になる)、23時: ホテル	トルクメニスタン・ホテル
5月13日	モスクワ⇒ レニングラード	8時: ホテル発、10時20分: モスクワの空港離陸、11時20分: レニングラード着、15時~: 市内見物(大型バス、日本語の案内嬢。エルミタージュ、ネヴァ河、巡洋艦オーロラ号、スゴルニー寺院(常盤、バスに置いて行かれる)、ネフスキー大通り)、20時: 食事、10分ほど散歩、ホテル	オーストリア・ホテル	5月29日	アシハバード ⇒モスクワ	7時45分: アシハバード空港離陸、12時30分(-2時間): モスクワ着、午後: 自由。大谷の自動車で郊外へ(モスクワ川上流)、夜: アルガリヤ料理店(修一、福田、大谷夫妻と)、大谷のアパートへ、2時半に目覚め、ホテルへ(大谷が送る。ホテルは閉まっており、女中を呼び扉を開け、部屋まで送ってもらう)	メトロポール・ホテル?
5月14日	レニングラード	6時: 日記、10時: ホテル発、噴水公園へ【注: ペレトゴフ】、12時半: ホテルで昼食、エルミタージュ、夜: 劇場でバレエ鑑賞「眠れる森の美女」、23時: ホテル、永田たちが待っており一緒に食事	オーストリア・ホテル	5月30日	モスクワ	6時頃: 日記、10時: トレチャコフ美術館、午後: プーシキン美術館、ホテル、 Gum百貨店(大谷の案内)、夜: 大谷邸、0時少し前まで話して帰る、5時少し前に目覚め日記	メトロポール・ホテル?
5月15日	レニングラード ⇒モスクワ	10時半: ホテル発、要塞【注: ペトロバロフスク要塞】、14時: レニングラード大学東洋学部日本語課主任ピニス、アクシモアホテルへ来る、喫茶店へ(加藤、修一も)、18時: 夕食、葡萄酒、21時半: ホテル発、22時45分: レニングラード空港離陸、23時45分: モスクワ空港着	メトロポール・ホテル	5月31日	モスクワ ⇒イルクーツク	博物館(旧ノボゼービチ修道院)、ホテルへの帰途にチェーホフの家、18時: 空港へ(大谷夫妻の車。福田、修一も)、20時: モスクワ空港離陸(オムスク経由でイルクーツクへ)	機中泊
5月16日	モスクワ ⇒タシケント	9時30分: ホテル発、11時20分: モスクワ空港離陸、16時20分: タシケント空港着、21時30分(現地時間): ホテル。夕食後、噴水の周囲(ホテル近く)散歩。ホテル入り口で関あき子の娘に会う	タシケント・ホテル	6月1日	イルクーツク	ホテルへ、9時半、朝食、13時まで睡眠、昼食後: インツウリストのバス(案内嬢)で19世紀の修道院、公園散歩、18時: 夕食、葡萄酒二本、眠り22時頃目覚めて日記、2時就寝	ホテル・シベリア
5月17日	タシケント	9時: 朝食、インツウリストへ行き滞在中のスケジュールを決める、10時30分: ホテル発、市内見物(ホテル前の劇場、百貨店、科学博物館、印刷所、革命広場(以上、車中から)。街の中心部の公園。(再び車中からか)一国立大学、マルクス通り)、ウズベク共和国政庁、アリシェル・ナバイ記念図書館、旧市街、回教寺院、ホテル、14時~: バラク・ハン教会、ホテル、18時~: コムソモリスカヤ公園、湖畔のインツウリスト直営料亭で食事、23時: ホテル	タシケント・ホテル	6月2日	イルクーツク	10時半: バスでバイカル湖へ。湖畔の博物館、16時30分: 観光船でイルクーツクへ、ホテル(福田、加藤と街散歩)、ウシャコフと別れ、日記(プハラの一日分のプランクを埋める)	機中泊
5月18日	タシケント	10時: ホテル発、東方研究所、ホテル、午後: 歴史考古研究所、市場、ホテル、バラジン氏邸(加藤と。後から福田、修一、野村呼ぶ)	タシケント・ホテル	6月3日	イルクーツク ⇒ハバロフスク	1時: ホテル発、空港のインツウリスト待合室で仮眠、6時イルクーツク空港離陸、8時: ハバロフスク着、ホテル、食事後眠り、17時に起きる、ブランデー、19時: 夕食、少し散歩。	イルクーツク泊
5月19日	タシケント	10時: ホテル発、チルチックへ、チャイハナ、ホテル、コムソモリスカヤ公園湖畔のレストランで食事、街歩き(永田、福田、修一と)、ホテル近くの喫茶店(福田、修一)、夕食、火酒二本、夜: 大衆酒場(加藤案内、ブランデー)	タシケント・ホテル	6月4日	ハバロフスク	10時: 作家同盟ハバロフスク支部の作家2名(ヒメンエンコ、ホジャ)と案内役が訪問、博物館、作家同盟ハバロフスク支部を訪問、ホテル、昼食、午後: 日本人墓地、温泉プール、百貨店、ヒメンエンコにミルクセーキ馳走される、夜: 夕食(放送局の中山が生卵持ってくる)	
5月20日	タシケント ⇒プハラ	7時: 日記二日分、(福田、1時半まで飲み途中欠席)、10時: 民芸館(ロシア大使ポロソフ邸)、13時: ホテル発、15時40分: タシケント空港離陸、プハラ着、18時: 食事、街を散歩(土塀の路地、ハナカ・ディワンベキ寺院)、ホテルで夕食、20時30分: 屋外劇場(加藤が切符購入)	プハラの宿				

(出所) 井上靖「第一回西トルキスタン西域の旅」(一)~(三)(神奈川近代文学館所蔵)より筆者作成。固有名詞、表現は可能限り原文のまま。【 】は筆者注

散歩に出ている（5月10日、13日、16日、19日、20日、6月2日）。タシケントでは加藤久祚の案内で大衆酒場へ行き、プラハでは屋外観劇をした。サマルカンドではガイド通訳のウシャコフの友人宅へ訪問し（5月23日、井上は不参加）、アシハバードでは現地でも出会った日系二世の青年須藤みのるの夫妻と二日間にわたり時を過ごした（5月27日はホテル、28日は須藤宅）。（表3）にみえるように、同行者たちはしばしば単独、もしくは数人で行動をとっていた。野村尚吾によると、常盤茂雄は写真を撮って回るため「ときどき雲隠れになって気をもませた」、加藤は知人・友人が多くロシア語が自在なため「訪問やら図書館通いにいそがしく、きまわった観光コースのときは、しばしば単独行動をとった」³³という。井上一行が受けた偵察らしき経験を挙げれば、野村が5月29日にモスクワ郊外へのピクニックへ行った際に制服の巡査から職務質問を受けたこと（にこやかな談笑）を書き留めているが³⁴、井上自身はこれについて記録していない。

とはいえ、かような井上靖一行の自由は、インツェリストによる外国人観光客の管理・監視体制の内側での“自由”であった。井上一行がソ連旅行を快適に過ごすことができた要因として、現地の招待者や日本人の配慮とともに挙げられるのは、一行がガイド通訳と極めて友好な関係を築いていたことである。井上一行のソ連内各地の移動には、モスクワからガイド通訳としてユーリー・ウシャコフ（ハバロフスク大学東洋学科出身の40歳）が同行していた。各訪問地ではさらに現地ガイドが一行に加わり、彼らの案内で各所を見学し、ウシャコフが通訳を務めた。モスクワから同行したウシャコフとは、野村は四週間も起居を共にし「おのずと親しみもわき、わがままをいう仲になった」³⁵といい、加藤はサマルカンドのウシャコフの友人宅で「深夜までウォッカを飲み、ウシャコフ氏と入浴して靴下をとり換えたのにも気づかず」³⁶というさまであったというエピソードを披露してい

る。井上一行のソ連旅行は、彼ら自身“上手く”ソ連旅行をした外国人観光客であり、一行に快適さのサービスと監視が行き届いていたという点ではソ連の観光政策の成功例であったといえよう。

6. 西域への夢とソ連の社会主義プロパガンダ

6-1 知識人の西域への憧憬

5月16日の朝は井上靖にとって特別な朝であった。「6時起床。睡眠時間は五時なるも熟睡しているので爽快。窓を開けると、快晴。すぐ前にポリショイ劇場の白い建物が見える。8時15分朝食。9時30分 Hotel 出発。いよいよタシケントへ向う。ソ連旅行の本盤にはいるわけ」³⁷—「西域ノート」にこう記されているように、井上にとってソ連旅行の目的地は（西域）、すなわち、中央アジアに他ならなかった。旅の主目的は、同地の遺跡巡りである。いよいよ中央アジア見学の初日となった翌17日の朝食後、井上は「Intourist へ行き滞在中のスケジュール決める」³⁸と記しているが、その詳細は「どこか遺跡発掘の現場があったら、ぜひ見せてほしいと、当地に着くなり頼んであった」という野村の言葉で補い得る。「当地のインツェリスト」（インツェリスト・ウズベク共和国支部）は、井上らの希望を聞き、科学アカデミーの歴史考古学研究所に問い合わせ、発掘中のアフリアブ遺跡の見学許可を取り付けた³⁹。

井上靖の西域への憧憬は、記録整理的な性格の「西域ノート」よりも創作作品や公的な発言において明瞭である。初めてのソ連旅行を控えた1965年元旦、井上は『朝日新聞』に「ある晴れた日に」という詩を発表し、学生時代からのサマルカンド行きの夢を謳った。そして、ソ連旅行を終えた翌1966年の年頭には、旅行が「私にとっては生涯での一つの事件」であり、帰国後に旅行記らしいものをほとんど書かなかった理由として「なれない砂漠の国の旅ですっかり疲れてしまったということもあったが、何となく中央アジアのことは自分の心の中に仕舞い込

んでおきたいような気持ちがあった。人に喋（しゃべ）ったり文章に綴（つづ）ったりすると、そこからどこかへ飛び立って行ってしまいそうな不安定な脆（もろ）さがあった」⁴⁰との胸中を披露している。横浜帰港時（6月8日）に「西域の旅」の印象を毎日新聞に取材された井上一行は、「中央アジアではサマルカンドなどの七世紀ごろの遺跡を見学、とくにプラハ【原文ママ】ではシルクロード時代からの民族や古い風俗にハダであれることができた」⁴¹と語っている。小説『西域物語』の冒頭には「歴史的に見れば、中央アジアは依然として西域に含まれ、その限りでは現在もこの呼称が初めに持った未知、夢、謎、冒険という要素は消えていない」⁴²との表現がみられるが、井上にとって中央アジアで遺跡、民族、文化に触れた経験は古代中国の「未知、夢、謎、冒険」の追体験であったのかもしれない。

かような西域への憧憬は、戦後日本の知識人に共通するものであった。1960年前後の出版界では、一種の「西域ブーム」がみられる。1965年1月17日付の『毎日新聞』は、「強い秘境へのあこがれ」を理由として学術書のみならず小説集や探検記など一般教養書でも西域物の出版が続いているさまを報じている。この記事の導入には西域ブームの牽引者井上靖の西域物が引かれ、記事の末尾には1958年秋にタシケントで開催されたアジア・アフリカ作家会議（主に社会主義国や中立国による会議）の準備委員会に出席するため同年春にタシケント、サマルカンドを訪れた作家堀田善衛（1918-1998）の「中央アジアの草原にて」からの要約—「西域にあこがれをもつ日本人は多く井上靖氏などは中級の西域病患者で、戦時から戦後に奥地に潜入しようとした人もあり、これらは重症である」⁴³—がある。堀田は著書の中で、自ら「西域病患者」を自覚しつつ、井上や身近な「患者」に言及していた⁴⁴。こうした戦後の西域ブームは、S・ヘディン、A・スタイン（1862-1943）、A・フォン・ル・コック（1860-1930）などの西欧の探検家や日本

の大谷探検隊による考古学的発見を礎とし、さらに白鳥庫吉（1865-1942）、藤田豊八（1869-1929）、桑原隲藏（1870-1931）など東洋史学者による戦前の西域研究の影響を受けて起った。戦後の知識人の間では西域、とりわけ、中央アジアの古代ソグディアナやティムール帝国の史跡がのこる古都サマルカンドへの憧れが共通してみられた。例えば、前掲のアジア・アフリカ作家会議（日本代表団の団長は伊藤整（1905-1969））に出席した遠藤周作（1923-1996）による、「日本人としては初めて、というところのことですから。草野心平さん【筆者注：1903-1988。詩人】から、前から憧れていたサマルカンドの小石を持ってきてくれないかと頼まれて、持って帰りました」⁴⁵との回顧もそれを示している。

西域への憧憬は、〈未踏〉ゆえの神秘への憧れでもあった。西域に対する形容は、作家に専念していた井上よりも現役の雑誌編集者であった野村尚吾の方がセンセーショナルである。野村の特派員レポートの題名は「秘境西域に行く」であり、それを単行書化した際には副題として「よみがえるシルクロード」が選ばれている。従来、容易に足を踏み入れられなかった場所が観光地として開放された時、その地は「秘境」と形容され、〈秘境への旅〉が見出されたのであり、それが大衆にも宣伝されたのである。最初のソ連旅行から約10年後に再びウズベク共和国を訪れた野村は、『毎日新聞』（1974年12月2日付）の「十年目のシルクロード」と題した記事の中で、彼の地で目撃した各国観光団や日本円の通用、ブハラ近代化などを挙げ、「遠くなった“秘境”のイメージ」⁴⁶と記している。このことは、かつて野村らが西域に求めていたものが未踏の地であるがゆえの神秘性であったことを浮き彫りにしていよう。

6-2 社会主義プロパガンダとしてのソ連のインバウンド観光

井上靖らが遺跡訪問を旅の主目的として強く望んでいたことは、史跡・文化財

を社会主義プロパガンダの一環として観光資源とするソ連の観光政策（2.参照）に合致するものであった。一方で、井上一行はウズベク共和国の首都タシケントやタジク共和国の首都ドシャンベの整備された町並みやコルホーズ、工業都市チルチックなどソ連の都市の近代化を目の当たりにしており、社会主義が到達したのを見せるというソ連のもうひとつの国際観光策の狙い通りの観光をしていた。

しかし、工業化、近代化された〈西域〉は、井上の見たいものではなかった。井上の紀行文「西域の旅」の構成が旅程通りではないことは先に述べたが（3.参照）、ベンジケント（「古代ピャンジケントの没落」）、ブハラ（「中世の生きるブハラ」、「幻の隊商とブハラの宝石市場」）、サマルカンド（「花と森の都サマルカンド」、「チムール朝栄華の古都」、「地下に眠る古きサマルカンド」）、タシケント（「緑の近代都市タシケント」）という諸都市の記載順は、古い町並みや遺跡の保存状態を基準とするもので、ソ連の都市の工業都市化、観光地化に抗う井上の心象を映し出している。野村は、「中央アジアのソ連地区を歩いていて、ブハラの町ほど強烈な印象を受けたところはなかった」、「こんどの旅の本命と思っていたサマルカンドでは、井上さんもブハラほどの感動が起こらず、いささかかすんだように見受けられた」とのごとく、中世の様相を「そのままに残している」ブハラが井上や野村の心を最も強く捉えたことを表現している⁴⁷。近代化されるタシケントについて、「西域ノート」では「どしどし古い物を壊して新しく建て直しつつある」と形容され、「西域の旅」では「オールド・タウンの一隅に帝政時代の市場で、隊商の集った場所だ」というところがあるが、現在はそうしたことを偲ぶよすがとなる物は、何ひとつ残されていない。西トルキスタンの都市は、サマルカンドも、ブハラも、それぞれ物凄いスピードで近代都市化されつつあるが、併し、その中でもタシケントの近代化が最も徹底して

いる。古いものは煉瓦のかけら一つ失くなってしまっただろう」⁴⁸と記されている。井上が希求していた西域の旅とは、現実のソ連観光というよりは時空を超えた歴史への心の旅であったのである。

他方、社会主義国を熱心に観察しようとした日本の知識人もいた。例えば、前掲のアジア・アフリカ作家会議の参加者たちは、ソ連が社会主義の宣伝のために見せた観光資源を熱心に観察し、その批評を日本社会に投じている。前掲の堀田善衛は『後進国の未来像』（1959年）において、西域への憧れと現実との間で葛藤しつつも、かつての支配国や影響国の民族運動に対し核兵器や軍隊で脅す西欧諸国には「先進国の後進性」が、ソ連などの社会主義国や民族独立に燃えるアジア・アフリカ、アラビアなど未来に希望をもつ「後進国」に真の「先進性」があると論じた⁴⁹。本会議に出席した野間宏（1915-1991）は、サマルカンドのティムール帝国の史跡のほか、フェルガナ地方の運河地帯やコルホーズ、アンデジャンの石油鉱山、ピオネール（少年団）の会などを特別に見学し、「社会主義国の、モスクワから遠くはなれた奥地の建設」を見ながら「日本人一人一人のすぐれた内容、その能力をあつめて、一つのすぐれた日本をつくりだすにはどうするかという問題」を見出している⁵⁰。同じく本会議参加者の加藤周一（1919-2008）は、ウズベク共和国と比較するためにクロアチア、インドのケララ州を旅行し、モスクワや北京と遠く隔たり「社会主義圏と自由主義圏との境に位置」する三国が独自の型で社会主義を建設しつつあるとの文明批評をしながら旅行記『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行—社会主義の三つの顔—』を纏めた。

7. おわりに

井上靖の「西域ノート」などの分析から明らかになった1965年の井上一行のソ連期中央アジア旅行の実態と特徴は、次のように纏められる。一行の旅行は、観光の世界的展開を背景として日本・ソ連

両国における観光が大衆化する中で実現した。ソ連側からみれば、それは、社会主義プロパガンダの一環としての工業化の達成物や史跡・文化財を観光資源とするソ連のインバウンド観光戦略が日本人知識人の〈西域〉への憧憬を上手く捉えた成果といえる。他方、井上側に注目すれば、一行の旅は、戦後の〈西域〉ブームを牽引する井上をはじめ同行者ら一行の〈西域〉に関する知識の蓄積があつて実現したものであり、作家としての井上を評価するソ連作家連盟からの招待旅行であり、一行各人の取材旅行でもあつた。ソ連の観光制度において、一行の旅は、招待旅行と一般観光との組み合わせであり、現地日本人の知人のサポートやガイド通訳との良好な関係もあり、一般観光とは異なる規格外の都市訪問や自由行動を謳歌できるものであつた。それは、旅の快適さの提供と監視とが行き届いていたという点で、ソ連観光政策の“成功例”ともいえよう。

本稿では、井上靖のソ連旅行と西域物と呼ばれる井上の文学作品群との相互影響や日本におけるシルクロード・ブームとの相関について、また、ソ連における史跡・文化財保護や観光全体の制度、経済、文化的な特徴については触れていない。また、一般日本人観光客のソ連旅行の実態についても研究の対象としなかつた。これらは、今後の課題とする。

謝辞

本稿の執筆にあたり、井上靖氏のご子息井上修一氏より多大なるご支援をいただきました。ここに深謝申し上げます。

注

¹ 〈西域〉という言葉の定義について、井上靖は、『西域物語』の冒頭にて、「甚だ漠然としたもの」であり、古代中国において「自国の西方に広がっている未知の異民族が国を樹てている地帯を、何もかもひっくるめて西域と呼ん

だ」ことから、中央アジアも含まれるという（井上靖「西域物語」〈1〉『朝日新聞』1968年10月6日付）。

仏教語や学界における「西域」の読み方は「さいいき」であるが、井上靖、司馬遼太郎は「せいいき」と呼んでいた（井上靖、司馬遼太郎『西域をゆく』文藝春秋、2012年、74ページ）。

² Воронкова Л.П., Афанасьев О.Е., Мармер Л.И. Исторические плакаты «Интуриста»: У истоков формирования туристского имиджа страны// Современные проблемы сервиса и туризма. Т.10. No.4. 2016. 参照。

³ 「“個人の接触”で平和を ソ連・東欧の観光攻勢 特別の為替レートも認める」『読売新聞』1958年1月7日付（夕刊）。

⁴ Орлов И.Б., Попов А.Д. Сквозь «железный занавес» SEE USSR! Иностранцы туристы и призрак потемкинских деревень. М., 2018. С170.

⁵ 高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観—社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム—』北海道大学出版会、2018年、178ページ。

⁶ 日本交通公社海外宣伝部「ソヴィエト観光事情」『国際観光情報』第84号、1955年、12-15ページ。

⁷ 野々村一雄『ソヴェト旅行案内』中央公論社、1966年。

⁸ 「シルクロードのソ連①」『読売新聞』1967年5月8日付（夕刊）。

この記事には「ソ連に残るシルクロード」を売り出し中とあるが、「シルクロード」という言葉をインツェリストが使用していたかどうかは未確認である。「西域」、「シルクロード」という言葉の使われ方については、改めて別稿で論じたい。

⁹ 1991年までウラジオストクは閉鎖都市であり、外国航路に開放されていたのはナホトカであつた。

¹⁰ トラベルジャーナル編集発行『Travel

Journal』第31巻第36号、94ページ。

当時の若年層（「ヤング層」）のヨーロッパ行格安ルートとしては、ナホトカ経由シベリア鉄道利用の「シベリア・ルート」のほか、フランス郵船の貨客船により東南アジア経由でマルセイユへ入港する「南回り」があつた（同上）。

¹¹ 「ソ連旅行が便利になる 交通公社が二つの新企画」『読売新聞』1967年2月22日付（朝刊）。

¹² 「弔問客次々と 急性肺炎で死去した作家、井上靖さん方」『毎日新聞』、1991年1月30日付（東京夕刊）。

¹³ 加藤九祚「ソ連旅行の思い出」高橋英夫・他『群像 日本の作家』（20 井上靖）、1991年、105ページ。

¹⁴ 井上靖「西域の旅／2」『太陽』1966年2月号、132ページ。

『太陽』に連載された井上靖「西域の旅」には、「写真／永田一脩」とのクレジットがある。

¹⁵ 前掲、加藤九祚、104ページ。加藤はソ連考古学の成果であるヒョードロフ編『古代文化の跡を求めて』（Под ред. Г.Б. Федоров По следам древних культур. М., 1951.）を翻訳し、『ソグドとホレズム』という書名で1968年に自費出版しているが、その前に井上に自身の翻訳を見せていた。この書に、ヤクボフスキー А. Ю. Якубовский の『古代ピャンジケント』が収められている。「ピャンジケント」とは、井上靖が訪問を切望したタジク共和国のベンジケントのことである。

¹⁶ 井上修一氏が所蔵する1965年のソ連旅行時の写真は全部で100枚ある。このうち、「靖さつえい」と記されているのは（図3）の写真のみである。修一氏によると、これらの写真は井上が撮影したものという（井上靖本人が写っている写真を除く）。

¹⁷ 第一回目のソ連旅行の後、井上は「中央アジアの薔薇」、「サマルカンドの市場にて」、「砂漠の詩」、「天山とパミール」などの詩と短編小説「古代ピャンジケント」、「テペのある街にて」、「ア

- ム・ダリアの水溜り」を發表している。
- ¹⁸ 井上靖『遺跡の旅・シルクロード』新潮社、1982年、8ページ。
- ¹⁹ 野村尚吾『秘境西域を行く—よみがえるシルクロード—』講談社、1966年、15ページ。
- ²⁰ 井上修一氏へのインタビュー (2018年10月26日、於同氏宅)。
- ²¹ 福田は、ソ連旅行の翌年 (1966年) には、同じくヘディンの「ゴビ砂漠の謎」の訳書(『ヘディン中央アジア探検紀行全集』7) を刊行している。
- ²² 野村尚吾の「秘境西域を行く」は、『サンデー毎日』の1965年7月11日号から10月10日号まで14回にわたり連載された。翌1966年に講談社より刊行された『秘境西域を行く—よみがえるシルクロード—』は、これを再構成したもので、加筆、修正されている。
- ²³ 前掲、野村 (1966年)、17ページ。
- ²⁴ 「井上靖氏ら帰国 西域の旅から」『毎日新聞』1965年6月9日付
- ²⁵ 1932年4月23日付ソビエト連邦共産党中央委員会 (ЦК ВКП (6)) 決定によって創設された「ソビエト連邦作家同盟Союз писателей СССР」のこと。
- ²⁶ 日本でのソ連への渡航手続きは、招待旅行と一般の旅行とは異なっていた。前掲の野々村の『ソヴェト旅行案内』によると、日本人のソ連旅行の手続きは、他の資本主義国への旅行よりも煩雑で時間を要したとされる。日本側での手続きとして①共産圏渡航趣意書の提出、②外貨申請、③旅券申請、④旅券受領、次にソ連大使館領事部において⑤入国査証の申請と受領、⑥検疫証明書 (種痘の予防接種) の取得と旅行中の携帯が必須であり、これら全ての渡航手続きには一か月を要した。⑤の入国査証の申請に際しては、一般旅行者はインツェリストへの旅費・滞在費の払込証明書類 (通常、旅行代理店とインツェリストとの往復電報の写し、滞在クーポン、チケット)、ソ連機関の招待による旅行の場合は招待状を旅券に添えて提出しなければならなかった (前掲、野々村、9-10頁)。
- ²⁷ 前掲、野村「秘境西域を行く」『サンデー毎日』1965年10月10日号、85ページ。
- ²⁸ 前掲、加藤九祚、104ページ。
- ²⁹ 前掲、野々村、31-37ページ。
- ³⁰ 同上。パウチャー、滞在登録、デジュルーナヤといった外国人観光客管理の仕組みは、国によっては今日においても、旧ソ連構成国にみられる。ウズベキスタン共和国では、近年、観光立国化を目指して管理型の観光からの脱却が試みられている (宮崎千穂、E・エルムロドフ2019、2020参照)。
- ³¹ Хрипун В.А. Некоторые проблемы организации иностранного туризма в Ленинграде в 1950-е — 1960-е годы// Вестник СПбГУ. Вып.1. СПб., Сер.2. 2011. С.153.
- ³² 井上靖一行に限らず、ソ連との関係で特別な人物には、便宜が図られた可能性がある。例えば、日ソ文化協会との関係で日ソ文化交流の橋渡し役として1968年にソ連に渡航した駒澤大学経済学部教授 (当時) 戸田武雄 (1930年生まれ) によると、「日ソ旅行社の旅行団は百名をこす人数であったが、法政大学の経営工学部長、国立大学の地理学の教授、慶応大学の震動力学の助教授、都市工学や情報科学の東大その他の大学院の学生、その他芸術家、婦人書道家、出版社の社長さんなどわれわれ十名ほどは、なかで特別のグループをつくって便宜をはかってもらうことができた」(「続ソ連小観」『研究論集』(駒沢大学) 15、1968年、102ページ) と述べている。
- ³³ 前掲、野村「秘境西域を行く」『サンデー毎日』、1965年10月10日号、87ページ。
- ³⁴ 前掲、野村 (1966年)、206-209ページ。この時、野村は、井上一行が休憩をしていた場所の傍らの川で釣りをしていた人の数が一人増えていたことに気づき、そのことを書き留めている。しかし、野村がこれを書き留めた意図も、釣り人の意図 (監視の任務を帯びていたのか) も定かでない。
- ³⁵ 前掲、野村「秘境西域を行く」『サンデー毎日』10月10日号、85ページ。
- ³⁶ 前掲、加藤九祚、104ページ。
- ³⁷ 「第一回西トルキスタン西域の旅」(一) (神奈川近代文学館所蔵)、5月16日付。
- ³⁸ 「第一回西トルキスタン西域の旅」(一) (神奈川近代文学館所蔵)、5月17日付。
- ³⁹ 前掲、野村 (1966年)、93ページ。
- ⁴⁰ 井上靖「砂漠の詩 バラの花と、塔の青さ、宝石市場の跡」『毎日新聞』1966年1月1日付。
- ⁴¹ 「井上靖氏ら帰国 西域の旅から」『毎日新聞』1965年6月9日付。
- ⁴² 前掲、井上靖「西域物語」〈1〉。
- ⁴³ 「出版界に西域ブーム 小説集や探検記 強い秘境へのあこがれ」『毎日新聞』1965年1月17日付。
- ⁴⁴ 堀田善衛『堀田善衛全集』(9) 筑摩書房、1994年、257ページ。
- ⁴⁵ 平山郁夫『東方の夢 遙か』(対談集) 美術年鑑社、1987年、81ページ。
- ⁴⁶ 「十年目のシルクロード 遠くなった“秘境”のイメージ 行き交う各国観光団、日本円も通用」『毎日新聞』1974年12月2日付 (夕刊)。
- ⁴⁷ 前掲、野村 (1966年)、44ページ。
- ⁴⁸ 井上靖「西域の旅／8」『太陽』1966年8月号、130ページ。
- ⁴⁹ 前掲、堀田、235-332ページ。
- ⁵⁰ 野間宏「アジアのなかの日本 アジア・アフリカ作家会議から帰って」『朝日新聞』1958年11月26日付 (朝刊)。

参考文献

[日本語文献]

[未刊行史料]

・井上靖「第一回西トルキスタン西域の旅」(一)～(三) 神奈川近代文学館所蔵 (井上靖文庫、請求番号: I01/00069559、I01/00069560、I01/00069561)。

[刊行文献]

・井上靖「西域の旅」『太陽』、平凡社、

- 1966年1月号～11月号
- ・井上靖『遺跡の旅・シルクロード』新潮社、1982年
 - ・井上靖、司馬遼太郎『西域をゆく』文藝春秋、2012年
 - ・加藤九祚「ソ連旅行の思い出」高橋英夫・他『群像 日本の作家』（20 井上靖）、1991年
 - ・加藤周一『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行—社会主義の三つの顔—』岩波書店、1959年
 - ・高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観—社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム—』北海道大学出版会、2018年
 - ・戸田武雄「続ソ連小観」『研究論集』（駒沢大学）15、1968年
 - ・トラベルジャーナル編集発行『Travel Journal』第31巻第36号、1994年
 - ・日本交通公社海外宣伝部「ソヴィエト観光事情」『国際観光情報』第84号、1955年
 - ・堀田善衛『堀田善衛全集』（9）筑摩書房、1994年
 - ・宮崎千穂、E・エルムロドフ「ウズベキスタン共和国における観光戦略—大統領交代による改革の促進とその歴史的背景（1991-2019）—」『日本国際観光学会論文集』第26号、2019年
 - ・宮崎千穂、E・エルムロドフ「ウズベキスタン共和国における「観光」の国家的意義の変容—新旧「観光法」の比較分析—」『日本国際観光学会論文集』第27号、2020年
 - ・野々村一雄『ソヴェト旅行案内』中央公論社、1966年
 - ・野村尚吾「秘境西域を行く」『サンデー毎日』1965年7月11日号～10月10日号
 - ・野村尚吾『秘境西域を行く—よみがえるシルクロード—』講談社、1966年
 - ・平山郁夫『東方の夢 遙か』（対談集）美術年鑑社、1987年

[新聞]

『朝日新聞』

- ・井上靖「西域物語」〈1〉『朝日新聞』

- 1968年10月6日付
- ・野間宏「アジアのなかの日本 アジア・アフリカ作家会議から帰って」1958年11月26日付（朝刊）。

『毎日新聞』

- ・「出版界に西域ブーム 小説集や探検記 強い^{シルクロード}秘境へのあこがれ」1965年1月17日付
- ・「井上靖氏ら帰国 西域の旅から」1965年6月9日付
- ・井上靖「砂漠の詩 バラの花と、塔の青さ、宝石市場の跡」1966年1月1日付
- ・「十年目のシルクロード 遠くなった“秘境”のイメージ 行き交う各国観光団、日本円も通用」1974年12月2日付（夕刊）
- ・「弔問客次々と 急性肺炎で死去した作家、井上靖さん方」、1991年1月30日付（東京夕刊）

『読売新聞』

- ・「“個人の接触”で平和を ソ連・東欧の観光攻勢 特別の為替レートも認める」1958年1月7日付（夕刊）
- ・「ソ連旅行が便利になる 交通公社が二つの新企画」1967年2月22日付（朝刊）。
- ・「シルクロードのソ連①」1967年5月8日付（夕刊）。

[外国語文献]

- ・Gorsuch, A.E., Koenker D.P., eds., *Turizm: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism*. Ithaca: Cornell University Press, 2006.
- ・Koenker D.P., *Club Red: Vacation Travel and the Soviet Dream*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 2013.
- ・Багдасарян В. Э. Орлов И. Б. и др. Советское «Зазеркалье» (Иностранный туризм в СССР в 1930-1980-е годы) М., 2007.
- ・Воронкова Л. П., Афанасьев О.Е.,

Мармер Л. И. Исторические плакаты «Интуриста»: У истоков формирования туристского имиджа страны// *Современные проблемы сервиса и туризма*. Т.10. No.4. 2016.

- ・Орлов И. Б., Попов А. Д. Сквозь «железный занавес» SEE USSR! Иностранные туристы и призрак потемкинских деревень. М., 2018.
- ・Под. ред. Федоров Г.Б. По следам древних культур. М., 1951.
- ・Хрипун В. А. Некоторые проблемы организации иностранного туризма в Ленинграде в 1950-е — 1960-е годы// *Вестник СПбГУ. Сер.2. Вып.1*. СПб., 2011.

【本稿は所定の査読制度による審査を経たものである。】